伊東静雄のリルケ体験

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡部, 満彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3387

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

伊東静雄のリルケ体験

渡部満彦

一

真珠湾攻撃からほぼ一年後の〝昭和十七年十二月六日印刷　昭和十七年十二月十日初版　札幌　青磁社〟と奥付にある堀口大学訳リルケ詩集『果樹園』の「訳者あとがき」に次のような文章がある。

《リルケは一八七五年、チェコスロヴァキアの首都プラアグの貴族の家系に生れ、一九二六年の末にアルプスの雪の峻峯に見守られて、瑞西の山中で孤独な詩人として死んでいつた。五十二歳だつた。死因は指にさした薔薇の棘だつた。／リルケの心酔者、若き女詩人、アリエット・オドラの『リルケの死』と題する詩の末節をここに掲げて、この短い『あとがき』の結びとしよう。／

君よ、聴け。昇る朝陽に向つて叫ぶ
アルプスの高根の風の大音を、
「――彼は死んだのだ、薔薇の刺にさされて！

詩人とは、ほかのことでは死なぬもの。」》（二四八－九頁）。

中国大陸に駆り出される兵士が背嚢に『万葉集』を入れていくというような、また良心的な文芸家を「日本回帰」へと余儀なくさせた時勢にあって、札幌という地方都市とはいえ堀口大学の訳詩が出せたということは意義深いし、また大変なことだったと見ていい。

リルケのわが国への紹介は明治四十二年十月一日雑誌『太陽』の森鴎外訳『家常茶飯（Das tägliche Leben）』が初めてだといわれているが、「現代思想」と題された鴎外と太陽記者との対話形式の文章が、その付録として掲載された（『鴎外選集』第十九巻　岩波書店、昭和五五、二五七－六五頁）。《作者のライネル・マリア・リルケといふのは、あれは余り評判を聞かない人》との太陽記者の質問に、プラハの都府で、幾百年かの旧慣に縛られている貴族の家にうまれた、鴎外よりも二十年も若い、《倅に持つても好いやうな男》で、親達は軍人にする積で、幼年学校にいれたが、《処が規則で縛つて置きにくい性質なので、十五の時にとう〳〵幼年学校から退学》した、ということを述べながら鴎外がリルケについて解説している。

まったくの余談になるが、森鴎外の《倅に持つても好いやうな男》という心境に対して、小堀桂一郎は、鴎外が本来の反自然主義者として返り咲きながら、自然主義と同じ土俵に上って同じ尺度で計られ、批評され、多く罵倒され、やがておもむろに脱皮してその本来の面目を取りもどしてゆく経路において、ボヘミアの古き都プラークからの、千年の古都ヴィーンからのリルケという若く新しい呼び声が何ほどかの助力と声援とを鴎外に送っていなかったかどうかと思いやっている。（「自然主義と反自然主義－明治四十二年暮の鷗外の反自然主義的転回を視点として－」『講座比較文学　二　日本文学における近代』東京大

学出版会、昭和四八、二一四頁）

高安国世はリルケは古いドイツの貴族の血をひいていることをひそかに信じていたけれども、それはどうも事実ではなく、父は鉄道会社の社員だったと書いている（『リルケ』筑摩書房　鑑賞世界名詩選、昭和二九、四頁）。高安はさらに語をついで、《家庭は不和で、一八八四年には父母が別居するまでになつた。八六年、十一歳でザンクト・ペルテンの陸軍幼年学校に入学してからのルネの苦しみは想像に余りがある。それでも堪え通して四年後にはメーリッシュ・ヴァイスキルヘンの陸軍高等実科学校へ進学した。しかし遂に辛抱しきれず、又健康も思わしくなかつたので、一八九一年同校を退学する》（二七二頁）と記している。

堀口大学はリルケが軍学校を嫌っていたという事実、退学したという履歴は知っていたであろう。「訳者あとがき」はわずか四頁であるが、時流が時流でなければリルケの軍学校嫌いについても触れたに違いない。しかし堀口としては若き女詩人、アリエット・オドラの「――彼は死んだのだ、薔薇の刺にさされて！／詩人とは、ほかのことでは死なぬもの。」を紹介するのが精一杯だったろうし、しかし「詩人とは、ほかのことでは死なぬもの」は悪気流の中における堀口大学の詩人としての覚悟と矜持でもあったろう。詩人は薔薇の棘で昇天できるのであって、戦争なんかで死んでたまるか……。短い『あとがき』の結びには堀口大学の沈黙の重さと深遠な想いがこめられている。堀口大学については知るところがないが、吉田精一によれば堀口は第四詩集『砂の枕』を大正十五年二月に、第五詩集『人間の歌』を昭和二十二年五月に刊行、この《約二十年間の空白は、主として軍閥政府による時運の圧迫のためで、詩人にとって不幸な季節であった》（『近代詩Ⅱ　吉田精一著作集十三』桜楓社、昭和五六、一五六頁）と同情している。堀口は戦争が終わってやっと『人間の歌』が詠えるようになった。

詩集『果樹園』の発行者は札幌市南八条西五丁目米岡来福となっているが、〝来福〟とはいかにも象徴的である、ここを乗り切れば、その先には未来があると。心ある人はそう信じていたであろうが、しかし『果樹園』のまさに一年前の現実の日本は、《ひとの心が／トマトや芋のはうに／行つてゐた》、詩とは無縁の時代であった。

菊を想ふ

垣根に採つた朝顔の種
小匣（こばこ）にそれを入れて
吾子（あこ）は「蔵（しま）つておいてね」といふ
今年の夏は　ひとの心が
トマトや芋のはうに
行つてゐたのであらう
方々の家のまはりや野菜畑の隅に
播きすてられたらしいまま
小さい野性の漏斗（じようご）にかへつて
ひなびた色の朝顔ばかりを
見たやうに思ふ
十月の末　気象特報のつづいた
ざわめく雨のころまで
それは咲いてをつた
昔の歌や俳諧の　なるほどこれは秋の花
――世の態（すがた）と花のさが
自分はひとりで面白かつた
しかしいまは誇高い菊の季節
したたかにうるはしい菊を
想ふ日多く
けふも久しぶりに琴が聴きたくて
子供の母にそれをいふと
彼女はまるでとりあはず　笑つてもみせなんだ

静雄の「菊を想ふ」の初出は、昭和十六年十二月一日号の『日本読書新聞』と『定本　伊東静雄全集』（人文書院、昭和四六）にあるが、それから四年後、日本国民と近隣諸国に多大な困苦をもたらした大東亜戦争は広島、長崎原爆投下による無条件降伏という条件によって終結をみた。ただ沖縄県民のその後などを見る限りそれは表面的な終結でしかなかったのだが。

伊東静雄は昭和二十年八月三十日の日記を《米田君外国文学研究の必要を云ふ》と書き始めて、八月十五日の印象を次のように記している。

数日前から心臓ひどく圧迫を感じて痛み、脈搏時々乱れるので、十五日は休養してゐた。高岡の西のおばあさんが来て、今日正午天皇陛下御自らの放送があるといふニュースがあつたと云つた。門屋の廂のラヂオで拝聴する。ポツダム条約受諾のお言葉のやうに拝された。やうにといふのはラヂオ雑音多く、又お言葉が難解であつた。しかし「降伏」であることを知つた瞬間茫然自失、やがて後頭部から胸部にかけてしびれるやうな硬直、そして涙があふれた。近所の人々は充分意味汲取れぬながら、恐ろしい事実をきいたことを感知して黙つてつき立つてゐた。国民誰もが先日の露国参戦に対する御激励の御言葉をいただくものと信じてゐたのであつた。先日の露国の国境侵入の報知をきいた時、国民は絶望を、歯くひしばつた心持でふみこらへてゐたのであつた。高岡先生は自暴自棄的な言葉を吐いて口惜しがられる。それから、ぞくぞく兵隊の帰郷の様をきいたり、見たりして、その心中はどうであらう。兵隊らは、毛布や煙草や米などを大きい包みにして家に帰つて来る。

翌三十一日の日記。

北海で最近戦死した（掃海艇）長野正の父色紙とりに来る。困つた。即席で、「こころ優しき益良夫の君が思出はわが胸の筐に枯るる時あらざらむとはに　八月盡伊東静雄」と書いて渡す。（略）

一日中雨。

十五日陛下の御放送を拝した直後。

太陽の光は少しもかはらず、透明に強く田と畑の面と木々とを照し、白い雲は静かに浮び、家々からは炊煙がのぼつてゐる。それなのに、戦は敗れたのだ。何の異変も自然におこらないのが信ぜられない。

さらにその二年後の昭和二十二年八月十五日の生活は次のようであった。

盛夏。おひるはおはぎをつくる。自分は十個もたべる。亀山君来る。煙草とお米をくれる。夕方ビールをのんで亀山君帰る。しばらくすると気分悪いと帰つて来て寝る。

表で二人一緒にねる。リルケの勉強。亀山君はこのごろ大へん衰弱してゐるやうだ。

いつの時代もあるところにはあるのだが、大都会ばかりでなく田舎町でも甘味料をはじめとして食料は払底し、国民は塗炭の業苦の中にあった。静雄は教師家業と農村地帯に生活していたためか、少しは余裕があったとみていい。煙草とお米、夕方ビール！彼の食した十個のおはぎは甘かっただろうか？

ところで本稿の筆者は何をはじめたいというのだろうか。杉本秀太郎はいう、《伊東静雄のことを考えるというのは、私には、彼が書いた詩を彼みずからまとめた詩集のなかで考えるということにひとしい。当然ではないか。だが、あえて言うなら、伝記家、書誌家の手によって伊東静雄は撫でまわされて黒光りしているが、彼の詩そのものは白

い状態のまま取り残されている。これを詩人の幸福と称することができるかどうか》（『伊東静雄』筑摩書房　近代日本詩人選十八　昭和六十、三頁）と。しかし「わがひとに与ふる哀歌」に現実の女人をさぐる素朴かつ健康な詩の鑑賞者と、《この日本のヒュペーリオンには、影の形に添うごとく「私」に随伴している「私」の分身、ひとりのベラルミンは、どうにか存在したように思われる。だが、ついにディオティーマは見出されない。彼女は影であってはならない》、《彼は時と場所を周到にととのえ用意して、ヘルダーリンの表現がまれびとのように収まるのを待った詩人である》（十頁）と分析する杉本との径庭はなんだろうか。〝ヘルダーリンの表現がまれびとのように収まるのを待った詩人である〟といわれることが〝詩人の幸福〟なのだろうか？

高等小学校卒の学歴に終生劣等感を持っていたという石垣りんに『略歴』という詩集がある。四歳で実母と死別、生涯に四人の母をもち、十四歳で赤坂高等小学校を卒業後、日本興業銀行に給仕として入社、労働組合に参加、定年まで勤務という伝記を知ることによって、あらためて石垣りんの作品を鑑賞しなおす素樸な読者、あるいは「土地・家屋」の《隣人はにつこり笑い／手の中の扉を押してはいつて行つた》という詩句から、このような庶民に日本興業銀行はちゃんと融資をしてくれたのだろうかと思いをめぐらす朴訥な読者と、《まるで切れ味のいい舞台作品を見ているような思いさえする詩である。テンポの早い展開はベケットやイヨネスコの芝居のような、悲劇にして喜劇的、喜劇にして悲劇的な物語を、読者の脳裏に焼きつけるだろう》（大岡信編『現代詩の鑑賞二〇一』新書館、平成十、五一頁）という大岡の衒学的読みの間に径庭はあるのだろうか。

土地・家屋

ひとつの場所に
一枚の紙を敷いた。
ケンリの上に家を建てた。
時は風のように吹きすぎ
地球は絶え間なく回転しつづけた。
不動産という名称はいい、
「手に入れました」
という表現も悪くない。
隣人はにつこり笑い
手の中の扉を押してはいつて行つた。
それつきりだつた
あかるい灯がともり
夜更けて消えた。
ほんとうに不動なものが
彼らを迎え入れたのだ。
どんなに安心したことだろう。

要するに一つの詩から、あるいは一つの詩集からどんな読み方をしようとも、伝記的、書誌的に撫で回そうとも、そこから「生きる意義」、「生きていてよかった」という実感を会得でき、贖罪を浄化できるような詩的体験を味わえればいいだけの話だ。そして杉本秀太郎につまらなかった詩が大岡信には感動を再建させるであろうし、その逆も真なのだ。堀口大学は詩とは次のようなものだといっている。

一人の心に灯をともす
別の一人に欠伸をさせる

「土地・家屋」は大岡篇からの引用だが、おはぎを十個食した伊東静雄にも石垣りんと同様のまなざしはあった。

露骨な生活の間を

毎日夕方になると東のほうの村から
三人の親子のかつぎ屋が
駅に向ってこの部落をとおる
母親と十二、三歳の女の子と
まだ十になったとも思われぬ男の子だ
めいめい精いっぱいに背負い
からだをたわませて行くかれら
ずん〳〵暮れるたんぼ道を
かれらはよく小声をあわせてうたっていく
そのやさしくあかるい子供うたは
いちばん小さい男の子をいたわり
またみんなをはげまして
小声の一心な合唱が
うず高い荷物の一かたまりからきこえる

それは露骨な生活の間を縫う
ほそい清らかな銀糸(ぎんし)のように
ひと筋私の心を縫う

(いまどんなお正月がかれらにきているか)

「かつぎ屋」という詩語も死語になったが、しかし「露骨な生活の間を」には石垣りんの「崖」のような視点はなかった。

崖

戦争の終り、
サイパン島の崖の上から
次々に身を投げた女たち。

美徳やら義理やら体裁やら
何やら。
火だの男だのに追いつめられて。

とばなければならないからとびこんだ。
ゆき場のないゆき場所。
(崖はいつも女をまつさかさまにする)

それがねえ
まだ一人も海にとどかないのだ。
十五年もたつというのに
どうしたんだろう。
あの、
女。

(引用は、高橋順子編著『現代日本女性詩人85』新書館、平成十七、七一頁より)

吉田精一は『近代詩』日本文学教養講座(至文堂、昭和二五)「第六章　戦後の詩壇(昭和二〇年――)」の章で「夕映」について次のように鑑賞している。

《自然を深くみつめ、そこから暗示を得て、それを個人のおのれのうちに転生させようとする意図、さうして自然のうちに人生的意義を見出さうとする意図がはつきり見られる。いはゞモラルがリリシズムに溶かされてゐるのがこの詩人の詩風だ。寡作な人だが、そのいくつかの作品は愛誦するに足る。しかしさういふ型の詩としては、この詩人の凝視は、精刻ながらあまりにも素朴であり、時には自然に甘えて、調和を強ひて早く見出さうとする心の弱さがある》（三五一頁）。

『座右宝』昭和二十一年九月号の「夕映」は一連二十二行の詩だが、吉田が指摘する「心の弱さ」をどう解いていいのか筆者は逡巡している。

夕映

わが窓にとどく夕映は
村の十字路とそのほとりの
小さい石の祠の上に一際かがやく
そしてこのひとときを其処にむれる
幼い者らと
白いどくだみの花が
明るいひかりの中にある
首のとれたあの石像と殆ど同じ背丈の子らの群
けふもかれらの或る者は
地蔵の足許に野の花をならべ
或る者は形ばかりに刻まれたその肩や手を
つついたり擦つたりして遊んでゐるのだ
めいめいの家族の目から放たれて
あそこに行はれる日日のかはいい祝祭
そしてわたしもまた
夕毎にやつと活計からのがれて
この窓べに文字をつづる
ねがはくはこのわが行ひも
あゝせめてはあのやうな小さい祝祭であれよ
仮令それが痛みからのものであつても
また悔いと実りのない憧れからの
たつたひとりのものであつたにしても

今日の子供は「日日のかはいい祝祭」さえ奪われ、今日の大人は「日日のかはいい祝祭」へのまなざしを失って齷齪としている。高安は詩人の使命とは次のようなものだという。

人間も自らの限りなく孤独な、限られた矛盾的存在を知覚し乍ら、この万物を我々の心で貫き、物らを全体とのかかはりに於てほめたたへうたふ事によつて、万物を永続するもの、永遠なるもの、精神的な高度の存在に救ひ上げる事ができる。

そしてこれを果たすことによってこの世界の秩序の中に入り、真の生命を得ることができるのだと（リルケ『ミユゾットの手紙』甲鳥書林、昭和十八、四一九頁）。

「露骨な生活の間を」と「崖」を比較すれば、「時には自然に甘えて、調和を強ひて早く見出さうとする心の弱さがある」といえないこともないが、静雄は「限られた矛盾的存在を知覚し乍ら」、詩作によってしか自己を回復しえなかったし、それによってしか贖罪できなかった、「仮令それが痛みからのものであつても／また悔いと実りのない憧れからの／たつたひとりのものであつたにしても」。静雄の無償へのあこがれは良寛、橘曙覧の「知足」を凝視するが、「知足」を実行できなかったところに弱さと負い目があった。

二

伊東静雄の出自はまぎれもなく「忘れられた日本人」である。郷土への強い愛着をもつ辺境の地で黙々と日常生活を生きる日本人から生まれた。したがって彼の全詩作を理解するには彼の生活史、つまり人間の一生の記録biographiaに依拠することに何の遠慮もいらないだろう。「伝記家、書誌家の手によって伊東静雄は撫でまわされて黒光りしている」ことが問題なのではなく、どのような方法論を取ろうとも、静雄が詩によって創造した理念（イデア）の形相（フォルム）を正しく認識し、それを他者に納得できるように主張ができるということが重要なのだ。それは伝記家であろうと書誌家であろうと例外ではない。

伊東静雄の詩的営為が本格的に始動したのは『明暗』からであった。『明暗』は伊東が学んだ大村中学の同窓蒲池歓一、福田清人らによって経営されていたが、昭和五年五月号に彼は「空の浴槽」を掲出している。

空（から）の浴槽

午前一時の深海のとりとめない水底に坐つて、私は、後
頭部に酷薄に白塩の溶けゆくを感じてゐる。けれど私は
あの東洋の祕呪を唱する行者ではない。胸奥に例へば驚
叫する食肉禽が喉を破りつゞけてゐる。然し深海に坐す
る悲劇はそこにあるのではない。あゝ彼が、私の内の食
肉禽が、彼の前生の人間であつたことを知り抜いてさへ
ゐなかつたなら。

「空の浴槽」の延長にあたるのが、『コギト』昭和十年八月号に発表され、第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』では二十五番目におかれた「漂泊」で、その中間が「氷れる谷間」（『文学界』昭和十年四月号）であるが、生前の詩集に採録されなかった散文形式のこの詩も第一詩集の他の作品と同様に、詩情（アクサン）・詩像（イマージュ）は伝わるが、詩意（イデイ）が今一つ掴めない。生存の不安なぞといってしまえばあまりにも陳腐すぎるが、これらの詩の想（藻）にリルケは認められず、むしろ日夏詩「闇の化怪」、「海底世界」の反響をみることができる、つまり日夏耿之介と気脈が通じていると思えるふしがある。静雄が日夏に親しんだという伝記的事実は今のところ見出せないのだが、日夏の『転身の頌』（大正六年）、《暗室に瞑目して妄想する病僧のあはれむべき狐疑》を詠った『黒衣聖母』（大正十年）に目を通していなかったという証拠もない。

闇の化怪　　日夏耿之介

化怪は光れり　土蛍のごとし
化怪は夥し　尽きざるなり
あらゆる夢を産卵しつゝ
闇の徂徠（ゆきか）ふこの夜をあゆめり
悲嘆するは何人ぞ
夜を誰何するは何人ぞ
あゝ化怪は世にみちみちわたる
われは何故にかく夜を安臥しうるか

海底世界　　日夏耿之介

青き水面を透して
日はほの赤くさせり

魚鱗のむれ　乱れ擾（さわ）ぎて
海草の隙（あはひ）に匿（かく）れ　しばしば
雑色の埃及模様を織りなせしかば

なかば錆びたる沈没船の砕片は
黒色砂丘のいたゞきに金字塔を築きたり
水死者の蹠たかきよりきたる

魚鱗のむれみだれさわぎて
若き新来者を相抱擁たり
見よこゝにして不思議なる観念の裡に
青ざめし死者の笑顔を
死者は踊れるなり　狂へるや
魚は魚とむすび　貝は貝とむすび
あゝ人は人と相接すなり

まとゐは尽きねど
水死の人魚と化り
砕片は塔をなす
海の底にして
人すべて鱗族たるをえうす

あゝ日はほの赤くこの世界を訪るる

漂泊

底深き海藻のなほ　日光に震ひ
その葉とくるごとく
おのづと目あき
見知られぬ入海にわれ浮くとさとりぬ
あゝ　幾歳を経たりけむ　水門の彼方
高まり　沈む波の揺籃
懼れと倨傲とぞ永く

その歌もてわれを眠らしめし
われは見ず
この御空の青に堪へたる鳥を
魚族追ふ雲母岩の光……
め覚めたるわれを遶りて
躊躇はぬ櫂音ひびく
あゝ　われ等さまたげられず　遠つ人！
島びとが群れ漕ぐ舟ぞ
――いま　入海の奥の岩間は
孤独者の潔き水浴に真清水を噴く――
と告げたる

耿之介と静雄のいくつかの詩には、詩語Diktionでも類同が見られる。それらの詩を一つ一つ並べて一覧することは本稿のテーマからそれることになるが、例えば太陽、そして疾風、海、草木、玩具等、「秋の日の林間に滴落ちる小泉の水沫を眺めよ」（「心をわけちらすなかれ」）、「あはれ　かの高山に登攀り／沈みゆく落日の悲壮に心かなしみつつも／内なる神の稜威を頌へんかな」（「ある宵の祈願の一齣」）、「叫び翔る月夜烏の悲鳴と」（「汚点」）といった詩法にも同じような模様を見出すことができる。日夏耿之介「花の中の死」の始まり三行と静雄の「桜」の三行詩、前者の濃彩と後者の淡彩。

花の中の死　　日夏耿之介

夏の日の後園に燃えたつ花は
恒にやはらぎて睡れるなり
燃えかつ睡れるはただ花あるのみ

桜

後園に
桜は孤樹になつて立ち
淡々しい花に満ちる

韻律ではどうだろうか。例えば「汚点」と「氷れる谷間」の出だしのリズムの共鳴、

汚点　　日夏耿之介

赤き五月の満月の手綱のもと
(/a ka ki 3/go ga tu no 4/ma n ge tu no 5/)
万物は白く烈しく息つかひす
(/ta zu na no mo to 6/ba n bu tu ha 5/)
(/si ro ku 3/ha ge si ku 4/i ki tu ka hi su 6/)

氷れる谷間

おのれ身悶え手を揚げて (/o no re 3/mi mo da e 4/te o a ge te 5/)
遠い海波の威すこと！ (/too i ka i ha no 6/o do su ko to 5/)
樹上の鳥は撃ちころされ
(/zu zyo no 3/to ri ha 3/u ti ko ro sa re 6/)

これらの指摘が単なる思い付きではないということを得心するには両者の個々の詩作品の精緻な追究が求められるがそれは他日を期したい。両者に共通して見られるのは「意識の暗黒部との必死な格闘」であったということは言えそうだ。なお日夏耿之介の各詩は『日本現代詩体系　第五巻』(河出書房新社、昭和五〇) から引用した。

本節の最後に耿之介の「少年に与ふる歌」を見ておく。

少年に与ふる歌　　日夏耿之介

八月は野の白宵に心おごりたるに
都市よりの早乙女たち
その悲しき眸を片丘の小陰に亡び
山ふもと　洋館は白き仔羊のやうに
七つの若き瞳をまばたき初めけり

その大いなる聖手を延して
神は海上遠く夕映の黄金砂を鏤めたまひぬ

きみがちちははも　きみが祕めたるひとも
胸疾みたまふ姉君も　仇敵の一団も集ひしぞ

あゝまんまろき青大空のもと
しどけなき砂丘に攀り
夏夕風の赴くなべに
哀傷かぎりなき愛の頌に生きよ　しばしなりとも

「哀傷」は人の死を悲しみいたむこと、「哀傷かぎりなき愛の頌」とは人の死を悲しむ歌だ。暮れ難き八月の野の夕べ、宇宙を生成しその運行をつかさどる神ははるかな海上から「夕映の黄金砂を鏤め」はじめた。都会からきた早乙女は野に佇立した片丘に長くのび始めた小陰で、夕暮れ時の名状しがたい悲しみを眸にたたえる。「山ふもと　洋館は白き仔羊のやうに／七つの若き瞳をまばたき初めけり」に宗教的・神話的アレゴリー、メタファー、あるいはメタフィジック (Metaphysik) な含意があるのか、無知な筆者には読み解けないが、幽暗からやがて

漆黒の闇への移ろいで、「まんまろき青大空のもと」に瞬きはじめた北斗七星のように、窓辺にランプの灯がともる。

「夕映の黄金砂を鏤め」がやがて闇に侵食されるに従い、喜怒哀楽の忘れかねた死者が蘇る。それまでのしばらくは足許のしっかりしない砂丘に行きつき、夏のようやく涼しくなりかけた夕風に身をまかせて。「きみが祕めたるひと」と「哀傷かぎりなき愛の頌」を紡げ。

三

第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』がコギト発行所から出たのは昭和十年十月であった。この詩集の主題は「帰郷者」に付された「同反歌」である。

同　反歌

田舎を逃げた私が　都会よ
どうしてお前に敢て安んじよう

詩作を覚えた私が　行為よ
どうしてお前に憧れないことがあらう

「同　反歌」は『定本　伊東静雄全集』によれば『呂』昭和七年十月号に「都会」と題して発表されたものであるが、《田舎を逃げた私が　都会よ／どうしてお前に敢て安んじよう／／詩作を覚えた私が　行為よ／どうしてお前に憧れないことがあらう》というテーマへのプレリュードが「晴れた日に」で、詩集標題と同名の「わがひとに与ふる哀歌」が主題ではない（ただ詩作の時の順序としては「帰郷者」が『コギト』昭和九年四月号、「晴れた日に」が『コギト』昭和九年八月号である）。

とすれば「わがひと」とは誰で、「哀歌」とは何かをしっかり把握することが、『わがひとに与ふる哀歌』を鑑賞するための前提となる。百科事典的性格をもつ標準的国語辞書『広辞苑』第二版（岩波書店、昭和四四）の「哀歌」の語義は「悲しい心持をあらわした歌」（二頁）となっているが、『学研国語大辞典』（学習研究社、昭和五三）では「かなしい心をよんだ歌。エレジー」となっており、類語として「悲歌、哀詩、挽歌」が載せられている（二頁）。『広辞苑』第四版と第五版CD-ROM版では「悲しい心持を表した歌。悲歌。エレジー」と語義を広げている。一方『角川漢和中辞典』（角川書店、昭和三四）では「人の死を悲しむ歌」（一八二頁）としか記述がなく、「かなしい心をよんだ歌」という語釈を取っていない。

学研は挽歌を同義語ではなく類義語（related term）としているので「人の死を悲しむ歌」と哀歌は一応別物と理解していいだろう。『広辞苑』第四版CD-ROM版は「挽歌」を「①中国で、葬送の際、柩車を挽く者がうたった歌。②死者を哀悼する詩歌。悼歌。哀傷歌。万葉集では相聞・雑歌とともに部立の基本」（ルビ省略）と説明している。

国語辞典と漢和辞典で見解がわかれてしまったが、他の辞典も覗いてみよう。上田万年、松井簡治編『大日本国語辞典』（冨山房、大正四）には「哀歌」の見出しが存在しない。『平凡社大辞典』（昭和九）十九頁には「悲しき心情を叙せる詩歌。心にかなしみてうたふ」とあり、出典として「荘子・天地」から「子非夫独絃哀歌、以売名声於天下者乎」を引用しているが、諸橋轍次ほか『廣漢和辞典』上巻（大修館、昭五六）五七八頁では「①悲しげに歌う」として「荘子・天地」から「子非夫博学以擬聖、於于以蓋衆、独絃哀歌、以売名声於天下者乎」を引いている。さらに「②悲しい調子の歌。悲歌。エレジー」として文選、左思、詠史詩から「哀歌和漸離、謂若傍無人」を出している。いずれの語釈も「人の死を悲しむ歌」という限定はなさそうである、というのは悲しいかな筆者は漢文が読解できないのである。

『広辞苑』の特長は語例（用法）の出典に明治以前のドキュメントが

用いられるのが通例だが、「哀歌」に語例がないということは明治以後の造語だろうか？

上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典上代編』（三省堂、昭和四二）には見出し語として「哀歌」を見つけ出すことはできないが、室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典』（三省堂、昭和六〇）二頁に「人の死をいたみ、哀悼の気持を言い表わした歌。追悼の歌」とあり、出典として、実隆公記永正二、二紙背から「抑一首哀歌、字々和涙拝読、且慰愁腸候」を引用している。明らかに「人の死を悲しむ歌」の角川派である。この大辞典から判別できるのは、「哀歌」が外国語のエレジーからの造語ではなく、室町時代にすでに「人の死を悲しむ歌」の意として使用されていたことが判る。

高橋渡は『雑誌コギトと伊東静雄』（双文社出版、平成四）でドイツ文学と静雄の関係についてかなりの頁を割いて触れながら、『わがひとに与ふる哀歌』が《ヘルダーリンの「メノンがディオテーマに与ふる哀歌」にならったとは諸家の言うところである》（二五一頁）と記している。ヘルダーリーンの作品名は「Menons Klagen um Diotima」だが、ドイツ語のできない筆者は本学コミュニケーション文化学科の大野真教授にKlageとElegieが同義語かどうかご教示を願った。大野教授は『集英社世界文学事典』（同編集委員会篇、平成十四）のエレジーの項をも引用しながら、以下のように親切に解説していただいた。

お尋ねの件ですが、こういうことだと思います。／Klageは「嘆き・悲しみ・（涙ながらの）訴え」といった意味ですのでElegieとは重なりませんが、これをKlagelieddとすると、「悲歌・哀歌」の意味になり、訳の上ではElegieと同じことになります。

しかしElegieは元々紀元前七世紀の古代ギリシャで作られた特定の詩形（二行一組の一定リズムを繰り返しながら歌い進む）であり、哀悼や愛などの深い想念を歌うときに用いられたものです。ルネサンス期以降はもはやそうした特定の詩形とは関わりなく、亡き人への愛惜の想いや愛の悲哀を歌う抒情詩そのものを指すようになったとされています。

従って、結果的に同じ訳語であっても、概念としてはKlagelieddのほうがより包括的で「嘆きの歌一般」を指すものと考えてよいでしょう。Elegieは本来その中の一ジャンルを指すものと考えられます。

ちなみにリルケの『ドゥイノの悲歌』はDuineser Elegienであり、旧約の「エレミア哀歌」はドイツ語ではDie Klagelieder Jeremiaです。（平成十八年十一月二十四日付電子メール）

このご教示よって筆者はKlageとElegieは同義ではないということ、Elegieは現在「亡き人への愛惜の想い」、「愛の悲哀を歌う抒情詩そのもの」を指示すると云うことが理解できた。従って高橋渡の「メノンがディオテーマに与ふる哀歌」、「メノン　ディオティーマを悼む」（川村二郎）というよりは、「ディオティーマを偲ぶメノーンの嘆き」、「メノンがディオティーマの為の悲嘆」（吹田順助）とするのが適切のようだ。

『わがひとに与ふる哀歌』以前に詩集に哀歌を題名としたものに、蒲原有明の『独絃哀歌』がある。網羅的調査を試みたわけではないので、『新体詩集独絃哀歌』以外を発見できていないのだが、このタイトルは例の「子非夫博学以擬聖、於于以蓋衆、独絃哀歌、以売名声於天下者乎」（「荘子・天地」）からの流用だろうか。『独絃哀歌』の全文はウェブサイトから参照できるが（http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00045.html）、「愛の悲哀を歌う抒情詩」が勝っている詩集といえる。

では伊東静雄の哀歌は「亡き人への愛惜の想い」、「愛の悲哀を歌う抒情詩そのもの」のどちらであるのだろうか、おそらく二者を意図していたと断定していい。第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』は「忘れられた日本人」である日常生活者としての静雄＝「私」と詩人＝「放浪する半身」との拮抗の上に、そしてついには放浪する半身＝詩人の、「私」＝「忘れられた日本人」への挽歌、あるいは「私」の同類である、

「忘れられた日本人」の「愛の悲哀を歌う抒情詩そのもの」として成立している。「亡き人への愛惜の想い」、「愛の悲哀を歌う抒情詩そのもの」に静雄のリルケ体験はどのように反映されているのだろうか？

さて「私」の側には、私に加えて〝老いた私の母〟、〝幼くて居た故郷〟（「晴れた日に」）、〝昔の私の恋人〟、〝死んだ父〟（「私は強ひられる――」）、「新世界のキィノー」、〝死んだ女（ひと）〟（「田舎道にて」）、〝住民〟、〝帰郷者〟（「帰郷者」）、〝私につらいひと〟、〝昔のひと〟（「冷たい場所で」）、〝悪戯ずきな青年団員〟（「海水浴」）、〝衆愚〟、〝悪口を言つた人間〟、〝幼児から投げられる父親〟（「静かなクセニエ」）、〝孤児の中学生〟、〝老いすぎた私〟、〝多くの家族の絆（きづな）〟（「四月の風」）、〝友人〟、〝私の生きてゐる亡父〟、〝他の患者〟（「病院の患者の歌」）、〝わが去らしめしひと〟（「行つて　お前のその憂愁の深さのほどに」）等が。

一方、「放浪する半身」としては〝孤高な思索を私に伝へた人！〟（「私は強ひられる――」）、〝小児〟（「氷れる谷間」）、〝有力な詩人〟（「海水浴」）、〝も一つの絆〟（「四月の風」）、〝秧鶏〟（「秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る」）、〝微笑のひと〟（「かの微笑のひとを呼ばむ」）、〝群るる童子〟（「行つて　お前のその憂愁の深さのほどに」）、〝め覚めたるわれ〟、〝遠つ人〟、〝孤独者〟（「漂泊」）等がイデア説明のための範型であった。

長崎県諫早から「忘れられた日本人」の息子が大正十五年京都帝国大学に進学するということは〝私の生きてゐる亡父〟にとっては立身出世の以外の何物でもない。法科へとの期待に反して静雄は国文科を専攻する。そこに〝昔の私の恋人〟が複雑に纏綿する。そんな彼にとって刻苦勉励は〝多くの家族の絆（きづな）〟からの要請となっただろうし、事実彼は卒業論文「子規の俳論」で最高点に属する八二点を獲得し、その全文が国文科機関誌『国語国文の研究』に掲載されるという僥倖に浴す。東京帝国大学卒業生の就職率が三十パーセントの昭和四年《厳密なせんかうの結果、熱心に校長に懇望され》て大阪府立住吉中学教に赴任するが、《私の行くところが級友中では一番いい所の様です》、ついで《（お喜び下さい。私の卒業論文は首席で通過しました》と友人にはがきを出しているが、それでも〝老いた私の母〟には不満足であったか。身内の証言は得てしてあてにならないが、大学卒業時父惣吉が知人の無尽破産の連帯保証を負わされたとすれば（江川ミキ「伊東静雄の思い出」『人文研究』昭和四十七年八月）、〝多くの家族の絆（きづな）〟からの京都帝国大学卒業生への期待はどうしても大きい。

《級友中では一番いい所》にも飽き足りなかった静雄は昭和五年四月大学院進学を志して古巣と交渉するが、それは実現しなかった。〝計画だけがあつて／訓練が欠けてゐた〟（「病院の患者の歌」）〝私の生きてゐる亡父〟が背負った借財のためか、静雄の子規論が、《一般の所謂研究といふものとして、あまりにも烈しい情熱を湛へて居る》（「伊東静雄君と『夏花』」富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社、昭四六、六九頁）ことが災いしたのか、それはわからない。

「……真実いふと　私は詩句など要らぬのです／また書くこともないのです」（「即興」）といった「忘れられた日本人」である「私」に挽歌を奉戴させ、《田舎を逃げた私が　都会よ／どうしてお前に敢て安んじよう／／詩作を覚えた私が　行為よ／どうしてお前に憧れないことがあらう》と逡巡しながら訣別した「亡き人への愛惜の想い」を綴り、「放浪する半身　愛される人＝詩人」が体験する「愛の悲哀を歌う抒情詩そのもの」が第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』であった。

昭和九年『コギト』四月号の「帰郷者」の「かえしうた」に対する長歌は次のようなものであった。

自然は限りなく美しく永久に住民は
貧窮してゐた
幾度もいくども烈しくくり返し
岩礁にぶちつかつた後（のち）に
波がちり散りに泡沫になつて退（ひ）きながら
各自ぶつぶつと呟くのを
私は海岸で眺めたことがある

絶えず此處で私が見た歸郷者たちは
正にその通りであつた
その不思議に一様な獨言は私に同感的でなく
非常に常識的にきこえた
（まつたく！　いまは故郷に美しいものはない）
どうして（いまは）だらう！
美しい故郷は
それが彼らの實に空しい宿題であることを
無數な古來の詩の讃美が證明する
曾てこの自然の中で
それと同じく美しく住民が生きたと
私は信じ得ない
ただ多くの不平と辛苦ののちに
晏如として彼らの皆が
あそ処で一基の墓となつてゐるのが
私を慰めいくらか幸福にしたのである

郷土への強い愛着をもつ辺境の地で黙々と日常生活を生きる日本人でありたいと願う「帰郷者」は、自分の意志でか、「強ひられて」か分らないが、「空しい宿題である」、「美しい故郷」に帰り着けた。しかし芸術事物Kunst-Dingを知ってしまった放浪する半身には、彼らの独言は常識的で同感できるものではなかった。とはいえ一基の墓となった「忘れられた日本人」に対する、「亡き人への愛惜の想い」、「愛の悲哀を歌う抒情詩そのもの」は詩人としての礼儀でもあった。

昭和九年の詩作品は九編で『コギト』六編（二月号「私は強ひられる」、四月号「帰郷者」、八月号「晴れた日に」、十月号「川辺の歌」、十一月号「**わがひとに与ふる哀歌**」、十二月号「冷たい場所で」）、『呂』三編（二月号「鶯」、六月号「四月の風」、七月号「ドイツ語からのハイネの訳詩」）。彼の代表作がこの年に作られている。

詩篇の一番多い年は昭和七年で二十三編を数えるが、『耕人』二月号「私の孤独を」、『童謡の国』九月号「ぼくのうた」以外は『呂』に発表された。この昭和七年の三月頃は《相変らずリルケの訳で、その日その日をすごして》（三月十二日付酒井ゆり子宛封書）いる。

四

ドストエフスキイに再三言及したのは小林秀雄だが、《僕は、十年一日の如くドストエフスキイの作を読んでいる。（略）僕はロシア語が出来ないので、彼の作はすべて翻訳で読まねばならない。彼の様な大作家は、翻訳で読んでも充分その力は現われていて、原書で読んだら、という様な事もあまり考えないのであるが、それにしても、いくらドストエフスキイが偉くても、これではわけが解らぬと思われる様な翻訳がわが国でも行われているが、仏訳でも英訳でもそういうものに屡々出会った》（『小林秀雄全作品　十四』新潮社、平成十五、一二五頁）という。この箇所の引用意図はドイツ語のできない筆者はリルケの翻訳に頼るしかないのだが、リルケほどの詩は《翻訳で読んでも充分その力は現われて》いるだろうと思惟するからである。

ただ翻訳の問題はやっかいである。かつて筆者もロシア語＝日本語機械翻訳の実験で、ゴーゴリの『検察官』の訳の比較をやったことがあるが、高橋英夫がリルケの『マルテの手記』の大山定一、望月市恵、生野幸吉、芳賀檀、杉浦博訳をそれぞれ比較検討して、《リルケ的な空間と事物を表現する独特な手法》、《こういうリルケの用語法をどこまで日本語に移せるだろうかという厄介な課題》に訳者は取組まなければならないと述べ、訳例を提示する（『詩人の館』青土社、昭和四七、二七五－六頁）。また、小堀桂一郎によれば『田園の憂鬱』はゲーテの『わが生活より』を「仮想敵」としていたといい、《作者佐藤春夫は、自分もまた自分の詩と真実とを書こうという企てによってゲーテのひそみにならいはしたが、自身ゲーテの原作にふれていたわけではな》

く、『詩と真実』は生田長江の翻訳を、『ファウスト』は森鷗外の訳を読んでいたのだと指摘する（「影響」研究をめぐる諸問題」『講座比較文学　八　比較文学の理論』、東京大学出版会、昭和五一、三四－五頁）。

翻訳の問題はこれくらいにして、次に体験や影響という問題であるが、高橋英夫はものを書く人間における影響と体験との違いを考察しながら以下のように論じる。

日本の近代文学研究の世界に目を移しても、影響ということは文学的にある人物の思想、方法、態度などが当人に受け容れられて、かなりの程度それを範として模倣が行われたという事実関係を示す用語であり、それ以上であることは少ないようである。影響は事実を言い表わしているのであって、理想を言い表わしていないし、又言い表わすこともできないという暗黙の了解が少なくともわが国にはあるかに感ぜられる。伊東静雄はドイツの詩を好んで読み、ヘルダーリン、リルケから影響を受けたというのは事実的な記述であり、伊東静雄研究家は出来得るならば、伊東静雄の内面に踏みこんでいって、ヘルダーリン体験、リルケ体験を現場でとり押えたいと願うにちがいない。尤もこういう願いは、文献の決定的な欠除などに災いされて、大抵は実現をみるには至らない。――体験はその人間の内部にある。これに対して影響はむしろ外側にある（「影響について」、『ユリイカ　特集リルケ』昭和四十七、第四巻十一号、八三－四頁）。

《体験はその人間の内部にある。これに対して影響はむしろ外側にある》とすれば、伊東静雄のリルケ体験とは彼の内部にとっていかなるものであったのか。大阪に住みついた伊東と放浪詩人ともいえるリルケとの心的交流とは？

静雄がいつ頃からリルケに親炙したかという事実すら確定していない。刊行物でリルケに触れた最初のものは『呂』昭和七年十一月号の「談話のかはりに（一）」である。ただ、ここでの彼の関心は新即物主義らしく、エリッヒ・ケストネルであった。この主義は事物に即して明澄な鏡で紛雑した世界を透徹しようとするものらしく、表現主義のアンチテーゼでリルケやゲオルゲの伴らしく、自分にも縁の遠いものではないとして、ケストナーの"Sachliche Romanze"を訳出している。

事実のロマンス

互に知合つて八年
（それだつたらいい仲と言ふものだ）
急に二人の愛情がなくなつてしまつた
世間でステッキや帽子がなくなる様に

二人は悲しかつた　わざと快活にした
何でもない様にキスしてみた
そして見つめ合つてみた　がそれから先がわからなかつた
そこでしまひに女は泣いた　男は傍に立つてゐた

窓からは船がいくつもウインク出来た
男は言つた　もう四時と十五分だね
時分だ　そこらで珈琲飲まうよ
隣室（となり）で人はピアノをさらへてゐた

二人は土地で一番小さいカフエに行つた
そしてめいめいの茶碗を掻きまぜるのだつた
夕方はずつと其処に坐つてゐた
二人だけだつた　そして何も話さなかつた
たやすく話はみつからないのであつた

Sachliche Romanze

Als sie einander acht Jahre kannten
(und man darf sagen: sie kannten sich gut),
kam ihre Liebe plötzlich abhanden.
Wie andern Leuten ein Stock oder Hut.

Sie waren traurig, betrugen sich heiter,
versuchten Küsse, als ob nichts sei,
und sahen sich an und wußten nicht weiter.
Da weinte sie schließlich. Und er stand dabei.

Vom Fenster aus konnte man Schiffen winken.
Er sagte, es wäre schon Viertel nach Vier
und Zeit, irgendwo Kaffee zu trinken.
Nebenan übte ein Mensch Klavier.

Sie gingen ins kleinste Café am Ort
und rührten in ihren Tassen.
Am Abend saßen sie immer noch dort.
Sie saßen allein, und sie sprachen kein Wort
und konnten es einfach nicht fassen.

(Lärm im Spiegel S. 65)

伊東静雄は次のように分析する、この詩は渇仰するほどのテーマも技巧もないが、即物的、事物的で第一連第二行の独言、第四行の比喩、第三連第一行と第四行、情景描写の映画のような仕方、第四連のしめくくりは技巧として全然まずくはないし、ケストナーには一九二九年に『鏡の中の騒音』という題の詩集があるが、どうしてこのような題を用意したかにもうなずけるものがあるという。ケストナーへの関心はしばらく続いたらしく、『呂』昭和八年七月号にも次の訳詩を載せている。

上流社会の人達・海抜千二百米　　ケストネル

彼らはグランド・ホテルに居る
周囲（ぐるり）には氷と雪とがある。
周囲（ぐるり）には嶺と森と岩とがある。
彼らはグランド・ホテルに居る
そして絶えずお茶を飲む。

彼らはスモーキングを着てゐる。
森では凍寒が鳴つてゐる。
一匹の小鹿が樅の大森林をくゞつて跳ぶ。
彼らはスモーキングを着てゐる
そしてポーストをにらんでゐる。

彼らは青いホールでブルースをおどる
その時外では雪が降る。
何べんも何べんも稲妻や雷鳴がする。
彼らは青いホールでブルースをおどり
とても忙しい。

彼らは非常に自然を崇拝する
だのにこんな処まで交通をせり上げる。
彼らは非常に自然を崇拝する
だのにこゝいらについて知つてる事はといへば
みんな絵葉書知識ばかり。

彼らはグランド・ホテルにゐる
そしていろ〳〵スポーツの話をやる。
だが彼らが室外に歩み出るのは一度だけ、毛皮を着て
それもグランド・ホテルの玄関までだが－
そして車にのつてこの地を去つてしまふ。

Vornehme Leute, 1200 Meter hoch

Sie sitzen in den Grandhotels.
Ringsum sind Eis und Schnee.
Ringsum sind Berg und Wald und Fels.
Sie sitzen in den Grandhotels
und trinken immer Tee.

Sie haben ihren Smoking an.
Im Walde klirrt der Frost.
Ein kleines Reh hüpft durch den Tann.
Sie haben ihren Smoking an
und lauern auf die Post.

Sie tanzen Blues im Blauen Saal,
wobei es draußen schneit.
Es blitzt und donnert manches Mal.
Sie tanzen Blues im Blauen Saal
und haben keine Zeit.

Sie schwärmen sehr für die Natur
und heben den Verkehr.
Sie schwärmen sehr für die Natur
und kennen die Umgebung nur
von Ansichtskarten her.

Sie sitzen in den Grandhotels
und sprechen viel von Sport.
Und einmal treten sie, im Pelz,
sogar vors Tor der Grandhotels－
und fahren wieder fort.

(Lärm im Spiegel S. 111-2)

ケストナーの原詩はWerke : [in neun Banden] / Erich Kästner / Herausgegeben von Franz Josef Gortz. München, Wien, Hanser, c1998. 9 v. : ill. ; 21 cm. Bd. 1. Gedichte : Zeitgenossen, haufenweise / herausgegeben von Harald Hartung in Zusammenarbeit mit Nicola Brinkmannから引用した。ハイネの「清掃」、それに次に述べるリルケの「カザビアンカ」の訳も含めて、静雄の訳詩の鑑賞と分析は稿を改めて検討することにしたい。

これら二つの詩は“Lärm im Spiegel”からのものだが、彼が参観したのはフランクフルトの大学の先生が一八八〇年から一九三〇年の諸家の詩を集めた『独逸抒情詩集』で、原題は“Deutsche Lyrik 1880-1930. Nach Motiven ausgewählt und geordnet von Martin Sommerfeld” (Berlin 1931) だそうだが、筆者はいまだこの書を通覧できていない。これにはリルケのドイノの第八悲歌が収められていたという（縄田雄二『ヘルダーリン――予め崩れる十九世紀近代　伊東静雄における受容との関連にて』西田書店、平成八、一六一頁）。

『呂』昭和七年十二月号「談話のかはりに（二）」ではライネル・マリア・リルケの『形象の本（ブウフ・デル・ビルデル）』についてはその絶妙な比喩的精神に脱帽するが、詩が散文と分かれる第一歩はこの

精神であると思っている、万葉集、古今集の表現手法を簡単におさらいして分ったことは、はにかみ勝ちな比喩的精神が独逸では美しいリードとなって育ったということ、それは静雄には魅力ある行き方で、自分の「静かなクセニエ」などそれへの足ならしだと述べる。「静かなクセニエ（わが友の独白）」は二十字三十二行の散文詩なので引用は差し控えるが、はにかみ勝ちな比喩的精神の美しいリードであるかは議論の余地がある。

高橋英夫は「そんなに凝視めるな」が《いちじるしくリルケ的であり、かつゲーテ的》であって、この作品によって《ゲーテがロマン派に先立ってロマン派を超克していたように、あるいはリルケが十九世紀ロマン主義の末流から詩を学びはじめて、反ロマン主義的に凝縮された詩法を磨きあげたように、伊東静雄も彼のロマン性によってロマン主義を超えなければならなかった》（『詩人の館』、一〇三―五頁）と発言するが、これを感得できるだけの用意がいまの筆者には欠けているし、多作であった、習作期でもあった昭和七年の詩篇、あるいは『わがひとに与ふる哀歌』、『反響』、『反響以後』等に『Die frühen Gedichte』、『Duineser Elegien』の雰囲気が見いだせないこともないが、日夏耿之介の場合と同様に筆者の宿題として先送りしよう。

さて昭和二十二年八月の日記には連日、夜はリルケでドイツ語の勉強といったことが記録されている。伊東静雄が所蔵していたリルケは次のとおりである。

Das Marien-Leben（Insel-Bücherei, Nr43）, Die Sonette an Orpheus（Insel-Verlag, Nr115）, Erzählungen und Skizzen aus der Frühzeit（Insel-Verlag,1928）, Die Frühen Gedichte（Insel-Verlag,1928）, Erste Gedichte（Insel-Verlag,1928）, Neue Gedichte（Insel-Verlag,1930）, Das Buch der Bilder（Insel-Verlag,1931）, Das Stunden-Buch enthaltend die drei Bücher（Insel-Verlag,1931）- Erstes Buch:Das Buch vom mönchischen Leben,1899. -Zweites Buch:Das Buch von der Pilgerschaft 1901. - Drittes Buch:Das Buch von der Armut und vom Tode,1903.Lou Andreas-Salomé, "Rainer Maria Rilke"（Insel-Verlag,1929）

これらの図書と片山敏彦訳『リルケ詩集』とをつき合わせながらリルケを鑑賞していったことは確実とみていい。新潮社版『リルケ詩集』は奥付によれば、昭和十七年五月十日に初版が出され、伊東静雄が蔵書としたのは昭和二十二年五月二十五日の六刷である。この片山訳『リルケ詩集』から静雄は読んだ詩に読んだ日付と原典の対応頁と思われる数字を『リルケ詩集』に直接記している。いまだ静雄蔵書にあるリルケ原本と照合ができていないし、筆者の手元にあるRainer Maria Rilke "Sämtliche Werke. Band 1", Insel-Verlag, 1955の該当箇所と静雄が記した頁と思われる数字とがあわないので、原典対応頁とする自信はないのだが、片山が依拠した原詩はインゼル社Rainer Maria Rilke "Gesammelte Werke.", Insel-Verlag, 1927と"Späte Gedichte", 1935、フランス語詩はMaurice Betz編の"Rilke : Poésie ",Émile-Paul, 1938、Lou Albert-Lasardのための詩は、彼女自身が編訳した"Rilke : Poèms", nrf, 1937と「凡例」にある。

八月十三日は「孔雀の羽Phauenfeder（ママ）」、「われは好む　神龕（づし）のマリアをIch liebe vergessene Flurmadonnen」、「蟋蟀のやうにすだくものをNennt ihr das Seele, was so zage zirpt」、「カザビアンカCasabianca」、「ボーデン湖Bodensee」が印されているが、「カザビアンカ」では冒頭節に×が鉛筆で引かれ、静雄自身の訳を試みている（同書五六頁）。

カザビアンカ　　片山敏彦訳

灰色の頭巾（づきん）かぶれる僧侶らが
糸杉の立ちつづく嶮しき坂を登りて到る
小さきみ堂を我は想ふ、
山腹に一つきびしく聳え立つ　その堂の屋根は錆びたり。

世に忘られし聖者らの彫像（みすがた）は

祭壇の神龕をば　寂寞の住み家とす。
夕されば　窪みたる窓透きて　夕明り
忍び入り彫像の円光と成る。

CASABIANCA

Am Berge weiß ich trutzen
ein Kirchlein mit rostigem Knauf,
wie Mönche in grauen Kapuzen
steigen Zypressen hinauf.

Vergessene Heilige wohnen
dort einsam im Altarschrein;
der Abend reicht ihnen Kronen
durch hohle Fenster hinein.

静雄は第一連を次のように直している。

恰も灰色の頭巾かぶれる僧侶らが
糸杉に登る如き姿して
小さき御堂のその屋根さびて
山腹に抗ひ立てるを

第二連について静雄はコメントしていないが、hohleの〝窪みたる〟にも工夫がほしいと思ったのではなかろうか。また「ボーデン湖(Bodensee)」の《黒ずみし割れ目を透きて》(五七頁)の〝黒ずみし割れ目〟に傍線をして「銃眼」と直している。原文はund schauen durch schwarze Schartenだが、手元の辞書(小学館『独和大辞典第二版コンパクト版』平成十二)には「(城壁上の)鋸壁の狭間」とあり、さらに図解されている。それから判断する限り「黒ずんだ銃眼」の方が正しい訳であろう。

リルケはルードルフ・ボォトレンダァ(Rudolf Bodländer)宛一九二二年三月十三日付書簡で《私の本に満ちてゐるあの「生を重い、苦しいものと見る」(Schwer-nehmen)ことは――、決して心の憂鬱(Schwermütigkeit)のことではないのですよ、》(高安訳『ミュゾットの手紙』、二二一頁)と告げている。伊東静雄の生涯もまさに「生を重い、苦しいものと見る」(Schwer-nehmen)ことの連続であった。それをよく知っていたのは伴侶であった伊東花子であろう。彼女は《亡くなる三十分前自分から手を合せて胸元へもって来た。多分あの時が自分の生命に対する責任?を我から解いたのではなかろうか》(「病床記」富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社、昭和四六、二二四頁)との感慨がある。

同じ書簡でリルケは続ける。《芸術は影響などといふことはてんで問題としてゐないといふのが、私のふだんからの推測です。しかし芸術の形成する作品が、尽きざる根源から抑へ難い勢ひで湧き出して来て、奇妙なまでに静かに、優越的に、事物の間に存在し立つやうになると、その生来の無私と自由と強烈さによつて、いつかそれがあらゆる人間活動の何らかの規範になつてしまふ、といふことはあり得るのです》(二二三―四頁)と。

リルケの生とは愛、死、神であったが、《私の父が嘗て私に、私が自分の使命だと考へてゐた芸術を、業余のすさびとして(士官としての職務の傍ら、又は法律家としての傍ら)やるやうにと望んだ時、私は勿論もつとも烈しく且つ頑固に反抗しないではゐられませんでした。(略)私はただ第一歩を踏み出すためだけにでも、もう家族や故郷の桎梏から逃れなければなりませんでした》(一九二一年十二月三十日付クサーファ・フォン・モース(Xaver von Moos)宛、高安訳前掲書、一三七頁)。このような幸運は静雄にはもたらされないものであった。だからこそ彼は「放浪する半身」を希求した。

最後にリルケの詩で心に残ったものを高安国世訳『リルケ』筑摩書房　鑑賞世界名詩選、昭和二十九年から引用しよう。

ときにふと思うこと、傷心と労苦ののち
運命はなお私を祝福しようとする、
祝日の気分に満ちた日曜の朝
笑いつつ少女らの通りすがるとき……
少女らの笑うのを聞くのはたのしい。

すると長いことその笑いは私の耳に残つている、
決して忘れられぬ、とすら私は思う……
日が丘の向うに消えてゆくとき
私はそれをうたおうと思い立つ……だが
もう頭上で星たちがそれをうたつている……

Manchmal da ist mir: Nach Gram und Müh
will mich das Schicksal noch segnen,
wenn mir in feiernder Sonntagsfrüh
lachende Mädchen begegnen...
Lachen hör ich sie gerne.

Lange dann liegt mir das Lachen im Ohr,
nie kann ichs, wähn ich, vergessen...
Wenn sich der Tag hinterm Hange verlor,
will ich mirs singen... Indessen
singen schon oben die Sterne...

高安は《あらゆる欲望や意味を絶して、ただ存在するがゆえに限りもなく貴重な、そして同時にこの世ならぬものとして若い詩人に快いおどろきを与える》（九頁）と解説しているが、この詩は筆者に静雄の「夜の停留所で」を思い起こさせる。

日常の中で困窮している貧しい言葉を、
人目につかぬ言葉を、私は大へん好む。
私の祝宴から私は彼らに色彩を贈る、
すると彼らは微笑み、だんだん快活になる。

彼らがおずおずと心の内に圧し殺していた本質が、
新しく又あらわれて来る、誰の目にも見えるほど。
彼らはまだ一度も詩の中を歩いたことがない、
今身慄いしつつ彼らは私の歌の中を歩く。

Die armen Worte, die im Alltag darben,
die unscheinbaren Worte, lieb ich so.
Aus meinen Festern schenk ich ihnen Farben,
da lächeln sie und werden langsam froh.

Ihr Wesen, das sie bang in sich bezwangen,
erneut sich deutlich, dass es jeder sieht:
sie sind noch niemals im Gesang gegangen,
und schauernd schreiten sie in meinem Lied.

これは静雄の「寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」に通うものがあり、またリルケは歌う、《私は事物がうたうのを聴くのが好きだ》（Die Dinge singen hör ich so gern）と。さらに「或る若き少女に（Ein junges Mädchen）」への書簡では《全自然の快濶な、浄光に満されたやうな諧調の中に成立つ真に精神的な歓喜を見逃さないやうにしなければなりません》（高安訳『ミユゾットの手紙』、十四頁）と書き送った。そし

てそこからGesang ist Daseinが結論される。それはまた伊東静雄の姿勢でもあった。

高橋英夫は万葉集巻二十には防人の歌が多いが、その中でこの前の戦争で小学生上級から中学生世代に特に記憶が残るのは〝大君の命畏(みことかしこ)み磯に触り海原(うのはら)渡る父母を置きて〟で、小倉百人一首は文弱と排斥、愛国百人一首と称するものが選定され、この一首も天皇忠誠の古勁な表現として馴染んだと「古代人の畏れについて――『万葉集』とケレーニイ」（『詩人の館』、一三八頁）の文章を始めているが、静雄が職を食む大阪府立住吉中学校は正にこの一句を御旗に益良夫を乱造したであろう。であって見れば教え子の安否のためにも日記に大本営発表を添付した、その心根が伝わってくる。「それなのに、戦は敗れたのだ」。

リルケが「ヘルダーリーン頌（ヘルダーリーンに寄す）」（AN HÖLDERLIN）を詩作したのは一九一四年九月であった。高安によれば七月十九日リルケは戦争の噂におびえるパリを後にして、ゲッティンゲン、ライプツィヒを経てミュンヘンに来て、そこで医師の治療を受け、医師の勧めによりイーザル河上流のイルシェンハウゼンの山荘に落ち着いて、そこでAN HÖLDERLINを書き上げた。戦争が開始されるとリルケも周囲の興奮に巻き込まれたが、やがて自分の本分は詩作することであると決心し、仕事の領分を守った。《その方が戦線から帰つて来る人たちにも、慰めと喜びとを与え得るのではないか、と。しかし身近な、若い詩人たちが次々と出征して行くのを体験して、彼の心はふるえないわけに行かなかつた》（高安『リルケ』、二一二頁）。ヘルダーリーン全集を編纂していたノルベルト・フォン・ヘリングラートの出征は大きな衝撃であったろうと高安は思いやる。

八月二十九日イルシェンハウゼンからミュンヒハウゼン伯爵夫人への書簡で、《今のような時、ヘルダーリーンを読むのは慰めです。このような詩が存在し、不安の藪を通して、ひとの心まで届くことは素晴らしいことです。ヒューペリオンも切実な思いで読みました。ヘルダーリーンは今日私たちが遭遇しているものを既に到る処に告げています。しかしまた始めから遥かにそれを脱け出ています。戦争や恋愛の上に遥かな雲と棚引いています》（高安『リルケ』、二一四頁）と書いている。

人類は愚かな戦争を再び繰り返したわけだが、上智大学事件をおこした良識の府たる大学でさえ当時〝大君の命畏(みことかしこ)み〟には抗しきれなかった。八月十五日伊東静雄はどんな異変が起きてほしかったのだろうか。そこにはしたたかに生きる「忘れられた日本人」もいなければ、「放浪する半身」もいない。戦時中の日記にリルケの文字がないかを探ったり、また昭和二十年八月三十一日の日記にこそ〝リルケは夜、『ヘルダーリーン頌』を一篇読んだだけ〟と時局や日常生活から超越して書き記してほしかったと望む筆者は、飽食暖衣に胡坐をかいて講壇で日を送る者として〝ない袖を振れ〟との過大な要求を伊東静雄にしているのだろうか。

〝伊東静雄の内面に踏みこんで、リルケ体験を現場で取り押さえた〟という達成感からは程遠いが、本稿を導入部として結果はどうであれ、今しばらくこの作業を続けたいと思う。